# 被災地におけるコミュニティ・ベースド・ツーリズム
## －持続可能な地域発展にむけて－

和歌山大学　観光学部
近藤真紀　金佳明　小原里穂　繁藝ひな子　高野愛梨　詫間奈々　吉村光

## 01 研究目的

近年、観光分野において"コミュニティ"が重要視されるようになった。その理由として観光対象が有名な大型観光地から地域の生活文化へと広がったことや、旅行者がよりオーセンティクな体験や交流をもとめるようになっているためと考えられる。

本研究の目的は、2013年のボホール地震で大きな被害を受けたフィリピン・ボホール島・マリボホク市トリル地区を対象に、現地調査を通して地域資源やニーズを検証し、地域住民との協働による持続可能なコミュニティ・ベースド・ツーリズムの創造を目指すこととした。

## 02 コミュニティ・ベースド・ツーリズムとは

コミュニティ・ベースド・ツーリズムとは地域コミュニティの創造によって開発するツーリズムで、個人、小グループ、企業、団体、政府などの協働によるものとされている(Sharlpey,2008,124)。トリル地区では震災時に外部からのボランティア団体が来訪したことを契機に地域の自然、文化資源を基にした活動を開始した。主に歌や踊りを披露し、伝統的な家庭料理を観光客にふるまうことが目的となっている。

## 03 対象地域概要

ボホール島はフィリピン中部ビサヤ諸島に属し、セブ島の南東に位置する。国内10番目の大きさを持ち、隣接するパングラオ島は近年ビーチリゾートが整備され、2017年には新国際空港が完成予定である。今回我々が滞在したマリボホク市トリル地区は、22あるバランガイのうちのひとつで人口563人、世帯数116世帯から構成される。主要産業は稲作・ココナッツ栽培で、その他建設業に従事するものも多く見受けられた。主にビサヤ語で日常会話がなされているが英語を話せる住民も多い。

## 04 ボホール地震について

2013年10月15日8時12分、M7.2の直下型地震が発生し、死者222人、行方不明者８人、負傷者796人となる大きな被害を出した。フィリピン最古の教会であるバクライヨン教会や主要観光地のひとつのチョコレートヒルズ展望台が壊滅的な被害を受け、観光産業に大きな打撃を与えた。現在も基金を募り修復途中である。トリル地区では地割れ、地滑りにより水路が遮断され、地震の半年後にようやく復旧に至った。住民2名が瓦礫の下敷きとなり死亡した。数棟の家屋が倒壊し、教会も全壊した。現在は仮設の教会で礼拝を行っている。

## 05 現地でのフィールドワーク

・2015年2月13日～3月4日
・観光学部生　8名参加

### ①ホームステイを通じた地域住民との交流

今回の滞在では4件の家庭にホームステイを受け入れてもらった。伝統的なフィリピン料理や、薪を使用した調理方法、手洗いの洗濯方法を教えてもらうなどして地域のありのままの生活を体験した。過去にアメリカ人、韓国人、欧州地域からの来訪者はあったが日本人は初めてだということで日本文化の紹介を行った。小学生向けに剣玉や風呂敷包みでの遊び方を紹介し、浴衣の着衣体験もしてもらった。当初は見ず知らずの異国人が大勢来たことで不信感を抱く住民もいたが、これらの交流を通してほとんど払拭することができたと考える。

### ②ホームステイの受け入れをする住民の声

ホームステイ先の主婦たちを中心に地域の課題や需要について聞き取り調査を行った。主に挙がった意見が**「雇用機会の不足」、「コミュニティハウスの建造」**であった。まず雇用機会の不足については、フィリピンの社会問題として長年叫ばれている問題であるが、農業を主産業とするトリル地区では震災後灌漑施設の崩壊により、さらに深刻化したといえる。そして地域の女性団体では海外の出稼ぎ労働の経験により衣類や雑貨の製作技術を習得した人がいるが、それを活かせる場所がないと語った。それにより地域住民がワークショップを開いたり、観光客と交流を持つことのできる「コミュニティハウス」の建造を強く要望していた。

ホームステイの受け入れに関しては、**「収入を得ることができる」、「他国の人と交流を持てる」、「それほど負担はかからない」**と肯定的な意見が多く、従来行ってきた伝統文化の披露に加えてホームステイという新たな可能性を見出すことができたと考えられる。

### ③新たなコミュニティ・ベースド・ツーリズム構想の提案

住民たちの意見や、滞在を通して感じた地域資源の魅力をまとめ新たなコミュニティ・ベースド・ツーリズム構想を提案し、マリボホク市庁関係者とトリル地区住民に向けてプレゼンテーションを行った。

内容は、ホームステイによる滞在型観光の推奨や、コミュニティハウス建造計画が主になっている。滞在型観光にすることにより、これまでの文化活動に加えてさらに地域の魅力を知る機会を創出し、各家庭に収入をもたらす仕組みを紹介した。コミュニティハウスの建造については技術を持つ住民たちが教え合い、観光客と気軽に交流を持てる場として提示した。

コミュニティハウス建造に関しては財政、管理面から行政の力を必要とするのでマリボホク市庁関係者には参加の要請を促した。市庁関係者の反応は、「なぜトリル地区なのか。」や「22あるバランガイの中でトリル地区だけに投資をするのは難しい。」という若干否定的な意見と、「コンセプトには賛成する。」といった肯定的な意見も聞くことができた。

## 06 フィールドワークを終えて

トリル地区では3週間に及ぶ長期滞在の受け入れは初めてということであったが、大きな問題なく終えることができた。当該地区において伝統的な歌や踊りが日常生活の中で定着しており、それらは観光客にとって非常に魅力的な文化資産である。外部者が地域に入ることで日ごろ当たり前に行われている生活文化が観光資源になりうることを住民たちは気づくことができ、また学生の帰国後、ひとりの住民はホームステイ・ケータリングに関する資格をマリボホク市で取得したという報告を受け自発的な行動を伺えることができた。震災により多くの住民が家屋を失い、コミュニティの一つの重要な核となる教会も失った。このような震災時には他国からの援助が必須であり、インフラがまだ行き届いていないフィリピンでは長期的な支援が必要になる。したがってこのようなボランティア従事者に労働してもらうだけではなく彼ら自身も食事を振舞ったり、歌や踊りを披露することで両者に利益のある持続的な活動形態であるといえる。

一方で自分たちの活動を批判的に再検討すると、外部介入によるコミュニティの主体性について問題が浮上した。前述で外部者による価値付けにより内部の住民たちが地域の魅力を再発見できると述べたが、それはあくまでも外部者が地域に対して理想を押し付けているとも取れることができる。またコミュニティ・ベースド・ツーリズムとは一般的に地域コミュニティが主体であることが前提となっている。今回我々が介入したことで、地域内で問題になっていた資本の再配分の不公平さが若干是正されたのだが、本来であればそういった地域システムの変化や価値の判断は地域住民が主体であるのが望ましいのではないかという議論もあった。それゆえに第三者としての地域への関わり方や、提案したコミュニティハウス建造案やホームステイによる滞在型観光の立案に対して慎重に検討する必要があると考えた。

## 07 今後の活動

本プロジェクトは２年計画のものであり、次回現地調査および活動は平成27年度２月を予定している。現在はプロジェクトメンバー内で滞在期間に提案したホームステイを通じたコミュニティ・ベースド・ツーリズム構想の再検討や、それらに関する知識の習得、事例研究などを行っており外部理想とコミュニティの理想が噛み合う現実に沿うものを議論中である。その方法としてPCM手法を利用し関係者、問題、目的分析を行ない緻密に策定している。慎重に議論を重ね実践することが持続可能性につながると考えているので今後も継続的な活動をしていきたい。